



## 歴史と伝説の虎御前山

虎姫町教育委員会 生涯学習課  
学芸員 福井 智英



虎御前山遠景

虎御前山は、滋賀県東浅井郡虎姫町の北部に位置する標高230m余りの小さな山です。東に名峰伊吹山を眺め、西には琵琶湖を遠望し、春には桜、秋には紅葉と四季折々の自然を楽しませてくれる風光明媚な山です。

1999（平成11）年に、山の中腹に県立虎御前山教育キャンプ場がリニューアルオープンし、自然の中で集団的、組織的な共同野外生活を体験することのできる施設として多くのキャンパー達で賑わっています。

虎御前山は南北に長く尾根が伸び、南側尾根は特に「八相山」と呼ばれています。ここは、かつて南北朝時代に足利尊氏と弟の足利直義が戦を交えたことで知られています（八相山合戦）。1338（北朝：暦王元年 南朝：延元3年）年8月、南朝方から足利尊氏が征夷大将

軍の命を受けると同時に、北朝方の弟足利直義にも征夷大將軍の命が下されました。室町幕府は当初権限が分割され、尊氏は全国の武士の軍事面を統括し、直義は政務を統括するという二頭政治で成り立っていました。しかし、執事高師直との対立により1349（北朝：貞和3年 南朝：正平4年）年直義は失脚、それまでの政務は尊氏の嫡子義詮に譲りました。

1351（北朝：観応2年 南朝：正平6年）年7月、直義は部下の軍を率いて敦賀へ逃れ、湖北や湖南の将兵を勧誘して兵力を増強します。兄の尊氏は、兄弟の争いを避けるため数度にわたり講和を申し入れましたが、話し合いは決裂。直義追討を決意し、同年8月諸軍を率いて湖北へ進攻し、虎御前山を取り囲むように布陣しました。9月12日尊氏の下知に

より総攻撃を開始、山の麓や周辺村々は激戦地となりました。直義軍は尊氏軍に破れ敦賀へ敗走、翌1352（北朝：文和元年 南朝：正平7年）年1月、尊氏に降伏しましたが、翌月には死去しています。直義の死は尊氏による毒殺説が有力です。

それから約200年後、虎御前山は再び戦の歴史舞台に登場します。戦国時代の織田信長と浅井・朝倉連合軍の戦いです。

1570（元亀元）年6月の姉川合戦後、浅井軍が小谷山（現東浅井郡湖北町）に籠城したため、信長は虎御前山に砦を築いて小谷城攻撃の持久戦に備えます。虎御前山は四方の見通しがきく独立丘陵であり、しかも小谷山のすぐ南面に位置しているため、最前線基地を築くのに適した場所でした。

信長の一代記『信長公記』(注1)巻5に「虎御前山御取出御普請程なく出来訖<sup>をはんぬ</sup>。御巧を以て、当山の景気興ある仕立、生便敷御要害見聞に及ばざるの由候て、各耳目驚かされ候。〔中略〕東は高山伊吹山、麓はあれて残りし不破の関、何れも眼前及ぶ所の景気、又丈夫なる御普請、申し難き次第なり」とあり、虎御前山の砦が大変要害堅固であったことが伺えます。

また、虎御前山の尾根上には古墳が点在し、信長はこれらを巧みに生かして砦を築き、ほぼ山全体に家臣を配置したようです。更に虎御前山と横山（現長浜市）間を繋ぐ押さえとして、八相山と宮部（現虎姫町宮部）の二カ所に要害を築くよう命じました。虎御前山から宮部までの道筋は、ことのほか悪路であったため、道の幅を三間半（約6m）の広さに高く盛り上げ、道の縁に敵方に向けて、高さ一丈（約3m）、長さ五十町（約5km）にわたる塀を築き、外側に水をせき入れて敵方の襲来に備えました。

こうして最初の攻撃からおよそ3年の月日を要した小谷城攻略は、1573（天正元）年8月、浅井氏滅亡、小谷城の落城によって終止符が打たれました。虎御前山の砦は、小谷落城後は廃城となっていますが、1576（天正4）年の安土城に代表される織田の特徴的な城づくりが定着する過渡期の砦として貴重な史跡であると言えます。

さて、虎御前山にはある伝説が残されています。「虎御前山 始は長尾山と號す、此山に桃須谷といふ處あり、其谷に井筒と號する泉あり。此地に一人の美女忽焉として顕れたり



虎御前山古砦図（彦根城博物館蔵）

容色類なし。せゝらぎ長者娶りて妻とす、其名を虎御前といふ。懐胎して十五筋の小蛇を産す、甚之を耻ぢて山東の淵に身を投ず、今の女性淵是也。爾来此山を虎御前山と號すといふ。」(『近江輿地志略』)

これは、虎姫町を代表する昔話の一つ「虎御前伝説」です。1889(明治22)年4月に町村制が施行され、その際この伝説にちなんで「虎姫村」と名付けられました。その後、1940(昭和15)年12月に町村制が施行、「虎姫町」と改められ現在に至ります。虎御前伝説は、町名の由来になっていることから、現在も地域の人々に語り継がれ親しまれています。このように長く受け継がれてきた伝説や昔話は、土地の風土や歴史、文化を素朴な形で今日に伝えてくれる無形の人類文化と言えます。

これら昔話の種類は、『日本昔話大成』(注2)の分類によると843話型となっており、その中には、人間と人間以外の動物・精霊・妖怪などと結婚生活を送るというパターンのお話が多く見られます。これらは総称して「異類婚姻譚」と呼ばれます。その内容は鶴女房、天人女房、竜宮女房、蛇むこ入り、犬むこ入りなど多種に及ぶ異類との婚姻が見られます。これらの中で、蛇女房や竜宮女房、蛤女房など海や池などの水界に関わる異類をモチーフにした話があります。

「虎御前伝説」では、虎御前姫が①井筒と呼ばれる泉に突如姿を現す、②女性淵という名の淵に身を投げ入れるなど伝説の所々に水辺を連想させる部分があること、また彼女が③15匹の小蛇を産むことなど、虎御前姫が人間ではなく蛇の化身であったことをイメージさせ、一種の異類婚姻譚と考えることができるでしょう。

蛇は、その長く醜い姿から一般的に執念深く崇りをなすというようなマイナスのイメージが強いのですが、その反面、好んで池や沼などの水辺に生息することから、水の精霊、水界からの使者とされ、川や湖などの水を司

る神として古来から尊ばれてきました。現在でも各地で蛇を水神として祀る地域は多く、大きな川や湖、池がある地域では蛇や竜に関する伝説が伝わっています。虎姫町でも田川、姉川、高時川など河川の占める割合が大きい関係からか、町内には昔からおろち(大蛇)に関する昔話や言い伝えが数多く残っています。くねくねと蛇行する川の姿そのものが蛇を連想させたのかもしれませんが。

虎御前伝説が伝わる虎姫町中野は、山の麓に位置するという地形から水の便が悪く、田畑はしばしば早害に見舞われ、人々は水を得るためにたゆみない努力を重ねてきました。そのため中野には水利に関わる伝説や祭礼が多く残され、その一つに「世々開長者伝説」があります。

世々開長者といえば前述で紹介した虎御前姫の夫ですが、彼は村の水不足を憂い、自ら資金を提供して灌漑のための水路を掘削し、高時川から水を引くという大事業を行った人



世々開長者疏水偉功碑

物として知られています。ただ出自等の詳しいことが伝わっておらず、実在の人物であったかどうかは不明です。

世々開は高時川分水の交渉にあたり、当時高時川を支配していた井口越前守弾正に、綾・錦・絹をそれぞれ千駄ずつ贈って水利権を獲得したと伝わっています。餅を贈ってできたことから、用水の取り入れ口（井堰）は「餅の井」と名付けられました。ちなみに「千駄」とは牛や馬千頭分の荷物のことで、綾・錦・餅をそれぞれ千頭分ずつ贈ったという話はいかにも伝説の域を出ないのですが、そこには莫大な資財を投じて分水工事が行われたということが伺えるのです。



高時川左岸に建つ「餅井堰跡」碑

人々が文字通り「生命の水」となる水利権を獲得するため、多くの犠牲を払ってきたことは紛れもない事実であり、そんな先人達の足跡を受け継いでいく中で、世々開長者という特定の人物が創り出されたのかもしれませんが。

伝説や伝承は、人々の中から生まれ、その生活や願いなどを映し出し語り伝えられてきたものです。私たちは世々開長者伝説に、生命の糧である水利権を得るためこの上ない努力と犠牲を重ねてきた先人への深い感謝、それと共に豊かな水を得ることへの願いを読み取ることができます。さらに言うなれば、私達にとって親しみのある虎御前伝説もまた、こうした先人達が築き上げた歴史を背景に生まれた伝説と考えるのもいいのではないのでしょうか。

前述で、蛇が水を司る神として、人々から篤い信仰を受けてきたと述べましたが、これを前提にすると、少しこじつけた考えかもしれませんが、「世々開長者が蛇の化身である虎御前姫を娶った」という異類婚は、つまり「世々開長者が水利権を獲得した」と読み替えることができないでしょうか。

私たちにとって水は農業用、飲用、防火用など日常生活に欠かすことのできない大切なものです。上水道ができるまで人々はそのほとんどを集落の中を流れる河川に頼ってきました。そして河川には水を司る神が存在し、人々は折に触れて治水・利水のための祈りを捧げ、河川を汚さないよういつも清潔に保つことを心掛けてきたのです。

その後、時代の変遷に伴い湖北農業水利事業が着手され、私たちはその恩恵を受けることができるようになりました。しかし先人への感謝と尊敬の念は、今尚人々の胸中に深く秘められ、中野では毎年4月に餅の井などの水利に関わる普請を区の行事として行い、その歴史を今に継承しています。

時が流れ、町の様子が変わっても、先人が時代と共に歩んできた数々の足跡は私達に受け継がれています。

そんな歴史の重みを懐に抱きながら、虎御前山は町のシンボルとして今日も人々に親しまれているのです。

注1 『信長公記』…信長の政治・軍事活動を記した一代記。全16巻。著者は太田和泉守牛一。記録としての信頼性も高く、同時代資料としても優れている。

注2 関敬吾『日本昔話大成』角川書店1980年

滋賀文化財教室シリーズ No.210号

発行年月日 2004年1月31日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525